い。ゼロは仮空のものだ。空ビンがはいるべき仮の空間がゼロだ。白い女の手が、7本の空ビンを運び去れば、そこに、ゼロという空間が残るはずだ。X氏は、まるで、中学生のように考えた。決して、酔っぱらってはいない。ただ、ないと思ってしまってから、妙に、気分がわるくなった。あの感覚と頭が考えることの間に鋭いギャップが生じるのだ。納得がいかないというよりも不快だった。眼で見ていると、まるで、空ビンが殺人されてしまったように思えてくる。おかしな表現だし、論理的でないかもしれないが、そのように言い表わした方が、気持にピッタリと合っている。どこからか運んで来られたものが、どこかへもち去られてしまう。動いたのは、手だ。何が手だと問いたいのではない。何が手を作っているのか知りたいのだ。手には手の言葉、手の論理がある。ないと感じたのは手だ。透明な手が、すべてを証明する鍵を握っていると思えてならない。

煙草がないという簡単なことに躓いてしまったX氏は、頭が混乱し、心が生きものとして微妙に動きはじめているのを感じた。眼も混乱した。もうひとつの透明な空ビンが影となって支えているために、空ビンが空ビンとして存在していると見受けられた。眼の力が強くなっているのか、弱くなっているのか、判断がつかないが、ないという感覚が眼の力にも大きな影響を与えはじめていることは確かだった。眼のなかに存在するものたちの強度が強くなったり弱くなったりして、ものたちが揺れているふうだった。耳鳴りがはじまった。頭の右半分が鋭い針で突き刺されるように疼いた。夕闇が濃くなった。

5

草原の緑の海を疾走する馬の群れがあった。

先導獣は風を切り、砂煙をあげ、直線になって疾走する。馬たちの眼は燃え盛り、全身が叫び声となって、声が声を呼び、流線形に流れる身体には力が漲り、群れ全体が火の塊りと化していた。縞馬たちの白と黒の模様がくっきりと草原の緑に浮かびあがって、空から降り注ぐ黄色い光に射しぬかれていた。大きな馬たちの眼は、燃え盛りながらも、どこか遠いところに焦点がむけられていて、輝やきと空虚が同じ眼のなかに2つの色として滲みでていた。何かに憑かれたかのように疾走する馬たちの、運動する力強い形だけが、全身のリズムとして現れている。どの馬も、1歩でも先に、先導獣をめざして走ろうとしていた。走ることが馬だった。力が馬だった。走る、ひたすら、大地を蹴って、熱い風を切り、遅れをとるまいと、脚の筋肉をいっぱいに使って、しなやかなリズムにのり、走り続けているのだ。走ることがそのまま馬の生命であり、燃える力の頂点で、光と衝突した。太陽は中空にあった。空は青の階段をどこまでも押しあげている。ビッグ・バンの風が吹いている。

群れの、最後尾を走っている馬の、脚の乱れが呼吸の乱れとなって、リズムが崩れ、眼に、一沫の不安の色が浮かび、2歩、3歩、半馬身と群れから遅れはじめた。最後の馬となったその2〜3メートル後に、追うものたちの小さな影があった。猫に似たその小さな野性動物が、2匹、3匹と